

こここのところあたり前のように「オンライン授業」という言葉を使うようになった。いずれ整備が進むものと思っていたが、現状に背中を押されるように、一気に動き出した。

遠隔授業については、オンライン授業と言っても様々であり、今のところどの方法がよいとは言えないのではなからうか。むしろ、この機会に考えるべきことは、「学校に通学する意義は何か」ということである。現代の学校は、知識や技能を教えることに加え、人と人との対話を通じて、集団の中で生きる身のこなし方などを学ぶ場でもある。容易なことではないが、遠隔教育の中でも、人との交わりに配慮した柔軟な教育が望まれるところである。大切なことは、従来型の授業とオンライン授業を使い分け、それぞれのメリットを生かしながらメリハリのある教育をしていくことである。

絵本作家の五味太郎氏は、あるインタビューで次のように話している。

「むしろこれがチャンスだぞって言いたいな。心も日常生活も、乱れるがゆえのチャンス」「だって、学校も仕事も、ある意味でいま枠組みが崩壊しているから、ふだんの何がつまらなかったのか、本当は何がしたいのか、ニュートラルに問いやすいときじゃない？」と指摘している。「こうなると、世界の全体像は誰もわからない。せっかくなら、前よりよくしましよよ」「今こそ、自分で考える頭と、敏感で時折きちんとサボれる体が必要だと思う」と訴えている。

このような状況において、残念な報道に触れることもある。それは、差別と偏見に関わることである。差別とは、特定の集団や属性に属する個人に対して特別な扱いをする行為である。正当な理由なく不利益を生じさせる行為である。具体的には除外行為や拒否行為である。

一方、偏見とは、十分な根拠もなしに他人を悪く考えることである。文字通り偏った見方のことである。差別と密接な関係を持っている。

世界中で新型コロナウイルス感染者や医療従事者に対する偏見と差別が広がっている。学校現場にも、心無い差別の波動が訪れることが考えられる。これに教師はいかに立ち向かうべきか。歴史を学び、正義の旗をはっきりと掲げ、毅然たる態度で生徒たちに接しなければならない。

ここ数ヶ月の間に、“普段”とか“通常”、“普通”というものがどこかにいってしまった。学校が存在することの意義、学級という集団の意義、一つ一つの学校行事の意義、教師がいることの意義、授業の意義など、ずいぶんと「意義」について考えさせられた。普段や通常であれば、どれもこれほどまでに考えることなどなかったことばかりである。それが、このような非常時、非日常となると、否応なしに考えさせられる。

その結果、改めて気づかされたことも多い。当たり前のように行ってきたことが、本当に必要なことだったのか。正しいことだったのか。この機会に見直した方がよいのではないか。続けることに意義があるのか。次から次へと問いが生まれていく。

もしも意義を別な言葉で言い換えるとすると、「価値」や「重要性」だろうか。価値が認められれば実施すればよいとなる。重要性が高ければ、ぜひやったほうがよい。反対に、重要性が低ければ見直しの対象となる。今まで多くのことを協議してきた。結論を出すための判断基準の一つに意義があった。これからも意義を考えながら前に進んでいきたい。